

令和三年度 女性教師アンケート中間報告

森 下 恵 王

一、はじめに

本発表における「女性教師アンケート」とは、現代宗教研究所において女性教師アンケートのプロジェクトチーム（丹羽宣子氏、三井妙真師、成田東吾師、森下恵王）を発足し、令和三年六月～七月にアンケートを実施したものである。

プロジェクトチームとしての正式なアンケート報告書は、別途発行予定であるが、本発表では、中間報告として、当該アンケートの主立った回答の集計や分析について概要を報告したい。

二、アンケート実施の経緯（女性教師アンケート再調査の要請）

現代宗教研究所（以下、現宗研）では、かつて「女性の社会進出に関する数値目標」（二〇二〇年までにあらゆる分野での指導的地位に占める女性の割合が三割程度になるよう取り組むことを期待する）が発表された社会背景の中で、平成十四年に日蓮宗全女性教師を対象にアンケート調査を実施した^二。

今回の女性教師アンケートは、各方面から再調査（追跡調査）の要請が現宗研になされていたことに起因して行ったものである。

再調査の要請は、本宗女性教師の研究者である丹羽宣子氏^三の研究調査^四に際して、丹羽氏から提案がなされた。そして、それに呼応する形で、安中尚史氏^五、「全国日蓮宗女性教師の会」（以下、女性教師の会）からも、同様の要請が出されていた。

再調査を必要とする根拠としては、平成十四年以降、追跡調査が実施できておらず、平成十四年アンケート調査時から一定の年数が経過し、調査データが経年により、女性教師を取り巻く正確な現状を把握するための裏付けとなり難いことが挙げられている^六。

三、令和三年度「女性教師アンケート」調査結果

（一）調査の概要

アンケート調査は、令和三年六月に全国の女性教師（八六一人）にアンケート調査票を郵送し、回答者も郵送にて返送する形式で実施し回答数は四一九（四八・六％）であった。平成十四年の調査が女性教師一〇一五人中、回答数は三八五（三七・九％）であったことから、今回調査時は、女性教師数が減少したこと、また回答数が微増したことにより、回答比率が前回調査時より高くなっている。

送付したアンケート調査票のうち、二十四通が宛先不明などで返送された^七。

設問に関しては、連続性を保ち、経年変化を追いやすすするため、平成十四年アンケート調査と大きくは設問を変えていない。

（二）回答者の構成

「現在の満年齢」（図①）による、回答を返送した女性教師の構成年代は、六十歳代以上の世代の割合が半数を超え、

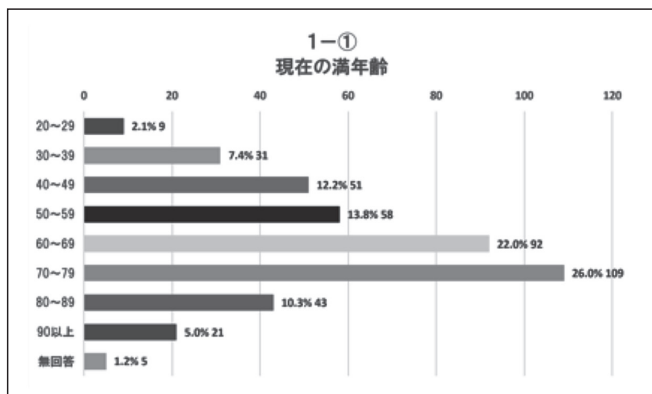
対象的に、二十歳代が二・一％、三十歳代が七・四％と、若年層が極端に少ないことが見てとれる。
 「現在の住居」(図②)^八によると、概ね教師数の多い地域の回答数が多い。

(三) 教師になるまで

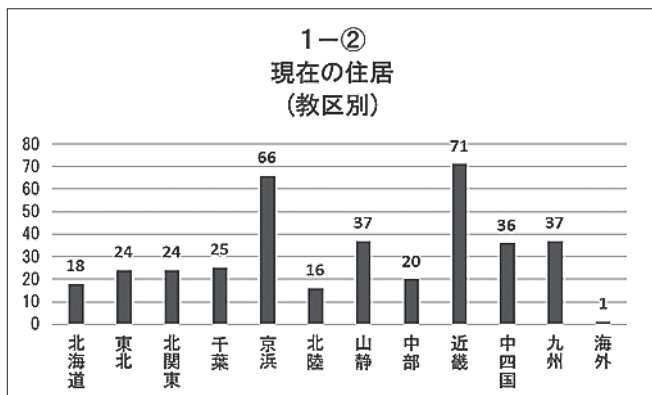
「入場した信行道場の種類」についての設問では、「補教信行道場」(二二・九％)「特別信行道場」(四〇・六％)「第二期信行道場」(三〇・三％)「その他」(一・二％)と、前回調査時が「補教信行道場」(四五・五％)「特別信行道場」(四四・七％)であったことを見れば、三割ほどの回答者が、前回調査時以降に教師になったことが分かる。

「道場入場時の年齢」(図③)は、若年層に偏らず、様々な年代での入場も多くされている状況ではあるが、前回調査時とその割合を比較すると、「二〇～二九」(一四・五％→二〇・五％)、

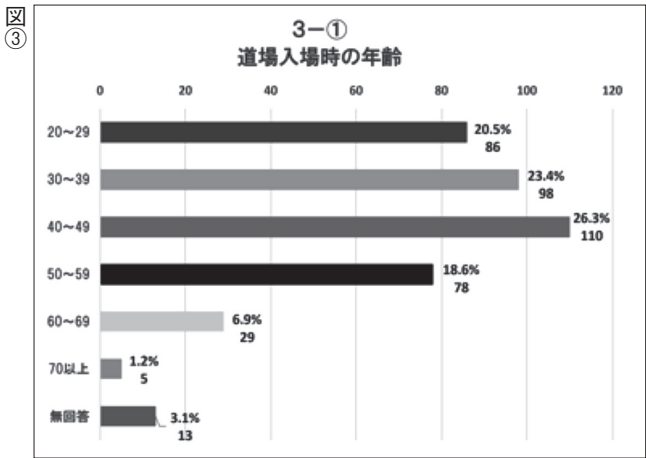
図①



図②



教師になる年代の裏付けとして、「現在の満年齢」及び「道場入場時の年齢」の程度の年数が経った（教師歴）教師層が中心なのか、平均値を示した（表①）。
 三十代～五十代にかけて教師になった現在六十～七十代の教師の人数が多く、ボリュームゾーンであることがうかがえる。



表①

		3-①道場入場時の年齢						
		20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70以上	計
現在の満年齢	20～29	9						9
	30～39	21	9					30
	40～49	19	19	11				49
	50～59	8	15	24	8			55
	60～69	13	20	28	21	8		90
	70～79	9	25	32	27	12	2	107
	80～89	4	6	10	15	6	1	42
	90以上	3	2	4	6	3	2	20
計		86	96	109	77	29	5	402

教師歴	10年未満	47	11.6%
	10年以上20年未満	99	24.4%
	20年以上30年未満	99	24.4%
	30年以上40年未満	78	19.3%
	40年以上50年未満	54	13.3%
	50年以上	28	6.9%

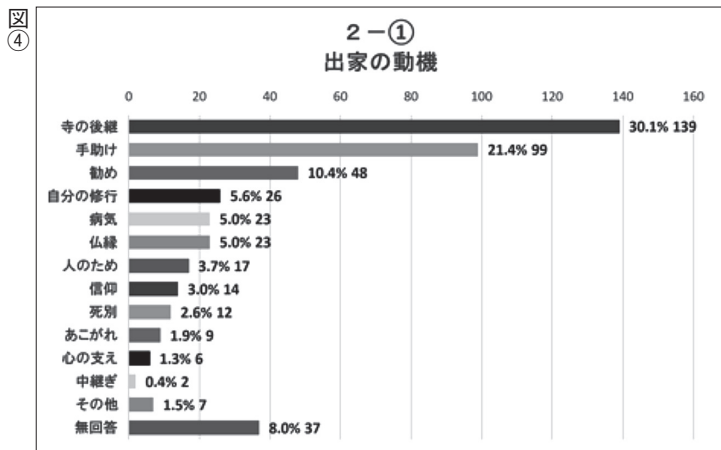
「三〇～三九」（二〇・三%）、「四〇～四九」（二七・〇%）、「五〇～五九」（二五・五%）、六十代以上が（八・八%）、「八〇～八九」（一・一%）といったように、若干ではあるが割合が下がっている。かつて様々な年代で教師になっていた状況が、若年層へ移行している可能性があると見るべきか。

また、二十代で教師になった現在三十～四十代の教師も多く、他の年代と比較して、これまで高い年代で教師になっていた傾向から、この集計でも、近年では若年層で教師になる傾向に移行している可能性がうかがえる。今後の傾向も注視したい。

「出家の動機」(図④)については、「寺の後継ぎ」(一三九人)、次いで「手助け」(九十九人)、「勧め」(四十八人)という回答が続いている。加えて、道場入場時の年齢と出家の動機とのクロス集計を行ったところ、出家の動機として、「寺の後継ぎ」を選んだ割合が、五十代(一五・九%)や、六十代(二三・一%)に比べ、二十代(五一・九%)、三十代(三三%)が高く、若年層で道場に入場する回答者は、出家の動機として「寺の後継ぎ」を挙げる割合が高いことが分かる。

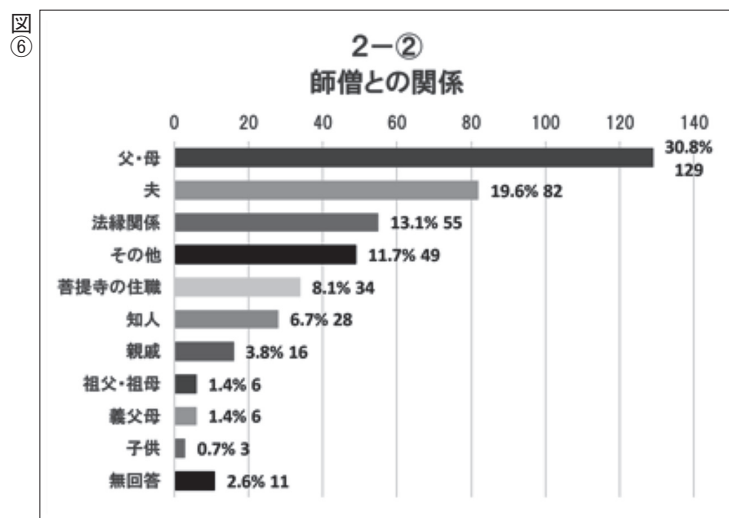
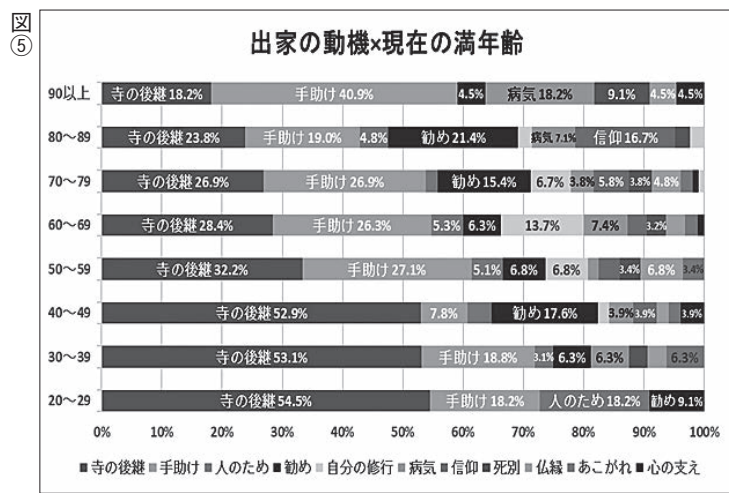
この点は、「教師歴」(現在の満年齢×道場入場時の年齢)で示された、若年層で教師になる傾向、また、「出家の動機」×「現在の満年齢」のクロス集計(図⑤)でも、若年層の出家の動機に「寺の後継ぎ」が多いことと合わせて考えれば、近年では、若くして寺院の後継ぎのために出家する(教師になる)教師の女性が増えている傾向があることが推察できる。

「師僧との関係」(図⑥)、つまり教師から見て師僧がどういった関係にあたるかについては、「父・母」の回答(一二九人)が多く、次いで「夫」(八十二人)、そして「法縁関係」(五十五人)という回答が続いている。



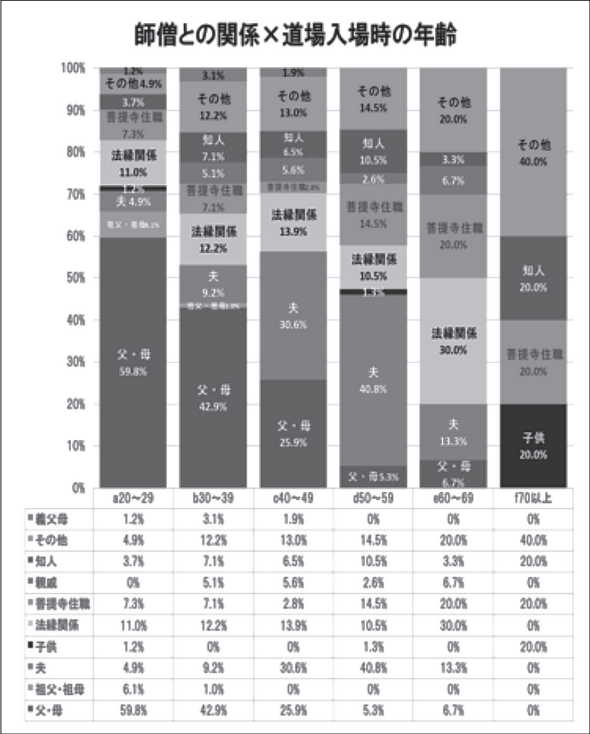
前回調査時は、「夫」（二八・七％）や、「法縁関係」（二〇・五％）、「知人」（二八・七％）に次いで回答比率であった「父・母」（二七・四％）が、今回は最も多くなり、三〇・八％となっている。

えている。



「師僧との関係」においても、「道場入場時の年齢」とのクロス集計を行った。これによると、入場時の世代が若いほど親が師僧となるケースが多くなる。世代が高くなるにつれて、当然、夫が師僧というパターンや、それ以外の関係の教師が師僧になる回答のバリエーションが増える。

図⑦

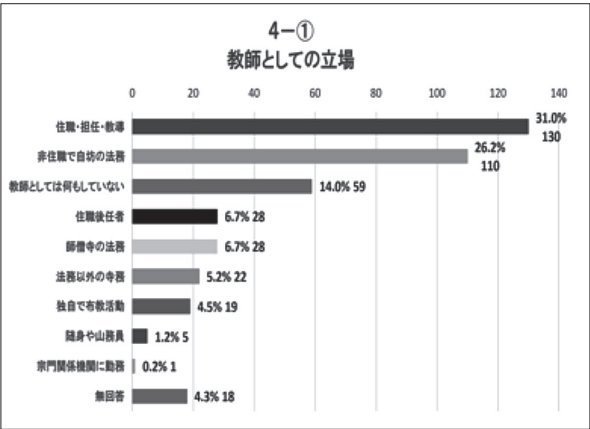


「師僧との関係」において、「道場入場時の年齢」も考慮すると（図⑦）、前回調査時は、ある程度の年齢になってから様々な理由で教師になっていく教師が多かったのに対し、近年では、主に若年層が、父母を師僧として、寺の後継を目的として教師になる傾向に移行しつつあることが考えられる。

（四）女性教師の実情

現在、教師となった女性がどのような状況に置かれているのか。「教師としての立場」の設問（図⑧）では、「住

図⑧



職・担任・教導」つまり代表役員の回答が多く（二三〇人）、次いで「非住職で自坊の法務」（二二〇人）、そしてここに「教師としては何もしていない」の回答（五十九人）が続く結果になっている。

現在の教師としての立場を「住職・担任・教導」と回答した回答者のうち「後継者はいますか？」という設問には、「決まっている」（四二・五％）、「決まっていない」（五七・五％）と、「決まっていない」が半数である。

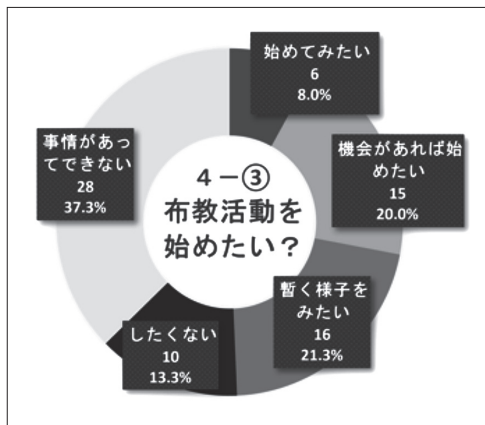
さらに後継者が「決まっていない」を選んだ回答者に、「今後どうする予定ですか」という自由記述の設問を行ったところ、「法縁」か「仏縁」に任せるといった、自身で決められる状況でないほどで、先行き不透明なことを示す回答が多く見られた。

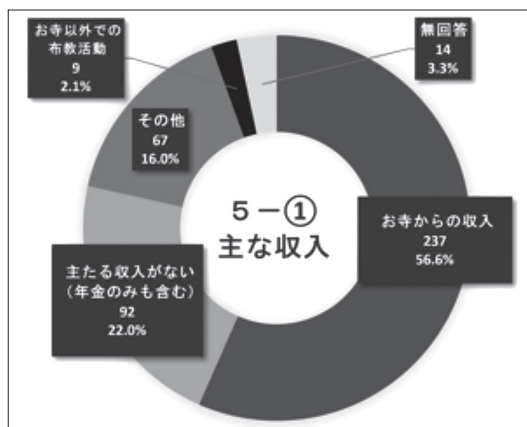
そして、先の「教師としての立場」の設問で「教師としては何もしていない」と答えた回答者に、「布教活動を始めたいかどうか」という設問（図⑨）を行ったところ、「始めてみたい」「機会があれば始めたい」「暫く様子をみたい」という、布教活動に対する一定の意思のある回答は計四九・三％である一方、「事情があつてできない」「したくない」は計五〇・六％と、概ね半々の結果となっている。

しかし、布教活動を「始めてみたい」「機会があれば始めたい」と答えた回答者に、「場所・機会等を紹介してくれる方はいますか。」という設問をすると、約六割が「紹介してくれる方がいない」という回答であり、意思があつても布教活動を始め辛い、厳しい状況がうかがえる。

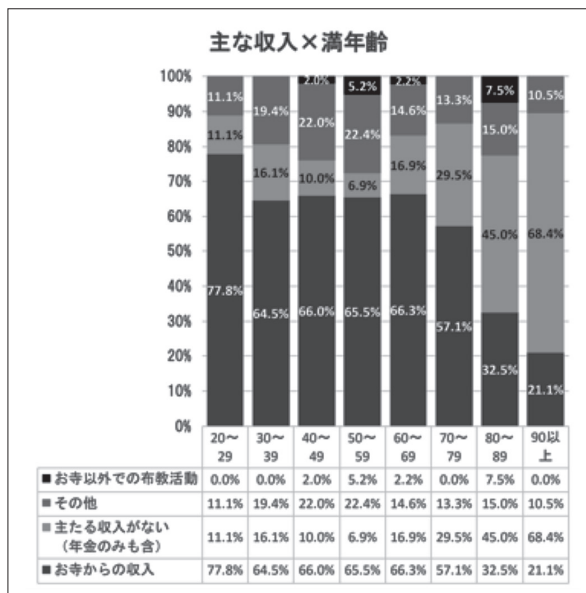
反対に、布教活動を「事情があつてできない」（二十八人）「したくない」（十人）を選択した回答者にその理由を尋ねると、大半の回答者が、

図⑨





図⑩



図⑪

自由記述欄に「高齢のため」「病気のため」など、年齢や体調などの理由でもう諦めている旨の回答を記載していた。さらに、布教活動についての意思で「したくない」「事情があつてできない」という選択肢を選んだ方に「還俗を考えていますか」という設問も加えている。この設問での回答（四十三人）のうち、「考えている」が四人、「考えたことがある」が七人と、少数ではあるものの、還俗の可能性を示す回答もされている。そうした布教活動の意思について、経済状況からその一端が垣間見える。

現在の主な収入についての設問（図⑩）では、「お寺からの収入」があるとした回答は五六・六%、「主たる収入がない（年金等受給者もここに含む）」は、二二%となっているが、これを満年齢とクロス集計（図⑪）すると、年代が高くなるほ

ど「お寺からの収入」が少なく、「主たる収入がない」の割合が高い傾向にあることが分かる。

これは年代が高まるとともに、（年齢、体調などもあり）収入を得るような法務を行っていないということでもあるが、他方で、若年層になるほど、「お寺からの収入」を得ることができているデータでもある。寺の後継として教師になる若年層は、寺院より収入を得る基盤も整っている教師が多いのだろうか。

（五）活躍の道すじ

「宗門での役職経験」の設問では、「ある」（二五・三％）、「ない」（七四・二％）無回答（一〇・五％）と、役職経験者が少ない状況にある。

講習・研修機関に関する設問（表②）では、様々な研修を受講していたり、あるいは受講したいとの回答が多く、スキルアップを望む声が多かったが、それとともに、

- ・ 現在、子育ても忙しく、落ち着いたら考えたい。
- ・ 若い時に布研等参加したくても家族のいる女性は難しく諦める方は多いと思う。参加出来る時には年齢制限を超えていた。
- ・ いろいろ参加したいと思いますが、年齢的に不可能です。
- ・ 年齢を重ね、他の活動をしているので時間的と体力的に難しい。
- ・ Zoom参加や単発のものがあれば受けたい。あまり留守にできないので…。

- ・ 日帰りで参加できる所があれば行きたい。

表②

6-② 今後参加したい 講習・研修機関		6-① 道場修了後 研修した機関	
布教院	10	甲種試験	53
声明	9	声明師養成講習所	46
九星気学・易	7	宗門大学	31
法華経・御遺文・教学	7	布教研修所	14
宗門大学	6	布教院	12
祈祷・修法	4	霊断	15
臨床宗教師・グリーンフ	4	宗門の研修	11
霊断	3	石川道場	3
布教研修所	3	祈祷・修法	3
心理学	3	ビハーラ	3
甲種試験	3	臨床宗教師・仏教師	2
		その他	60

という、研修環境等の問題を訴える声も多数寄せられている。

現在の、「女性教師の組織への入会」の有無^三についての設問（図12）では、前回調査時の「女性教師の全国的な組織が結成されたら入会するか」という設問も回答も対象的である。

女性教師の組織への入会の意思と年代とのクロス集計（図13）を行うと、六十代を中心に実際に入会している教師が多く、当然若年層ほど入会の実態がないことが分かる。

図12

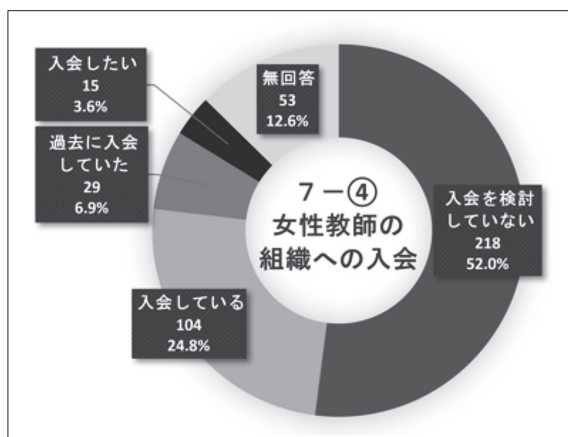
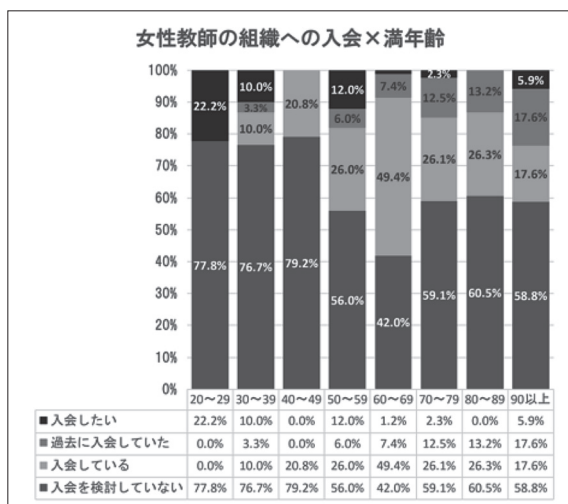


図13



自由記述には、組織への拒否感など、コミュニティ自体への関わりを避ける理由も示される。

つまり、現状として宗門の役職に就いている女性教師は少なく、スキルアップを行おうにも、家庭などの事情で断念したりする事情が垣間見え、コミュニティでの関わりも一部の教師に限定されていることから、宗門の役職やスキルのような、

キャリア（経験）が共有される機会が得られにくい環境であることがうかがえる。

（六）どのような想いでいるのか

「女性教師として不都合に思うこと」の設問（図14）では、二一・五％が不都合が「ある」との回答であり、平成十四年調査時より「ない」が増加（五二・二％→五七・

図14

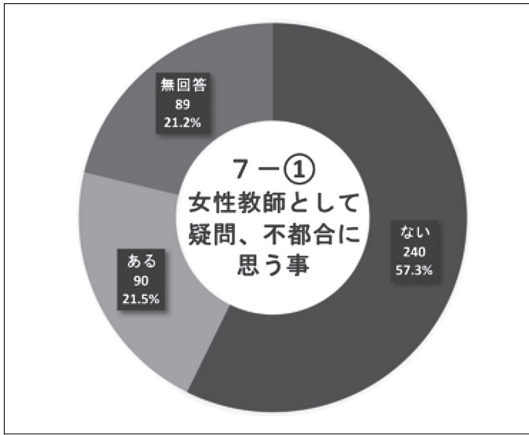


表3

・寺の法務が忙しく、婦寺院の活動にも参加しているので、女性教師という立場でなく一人の住職として日々法務に励んでいます。 ・今、特別不自由していることもないです。お寺の法務でいっぱいだと思います。 ・女性教師の会という名前が良くない。逆差別のよう、男性教師との距離を感じる。 ・まずは住職の後継として学ぶことに専念したいです。自坊と兼業で時間がありません。 ・共通の立場で話し合いの研修ができる事、行動を共にする事がなくなりました。 ・寺の持つてくるお香がけつきり差別がついている。どのような事をしているか知りたかったから。 ・外出が難しい。 ・高僧の為。 ・最初は何となく入会しただけ、退会しようかと気持ちを抑えたら、役付きになってしまった。 ・男性女性と別れて活動する必要を感じていない（ついでに法尼）という呼称も聞きません。男性僧侶も女性僧侶も「上人」とすべきだと思います。 ・歳です。コナで収入がへりお寺の事でいっぱい。なんとなく参加しづらい。機会がない。 ・特に、女性、だけである必要をあまり感じないから。女性だけの話し合いに出席、なやみ等！ ・女性教師という障りを感じることには必要を感じない。必要のあるときは男性教師と共に進んで活動すればよいことだと思う。女性だけ（♀）だけに強調点有り）である必要はない。 ・女性教師の組織に入会して、ませんが、入会しても仲々出席できない。時間がたてないのが現状です。 ・聞くとこのようにと大寺の教師が多いようです。時間がない。忙しい。 ・修行道場でお勤めで入会しました。 ・夫が住職で交代し、高僧の為、その世話を第一に考えているので。 ・全く何の組織にも入っていないと、情報がなかなか手に入らない。入っていたら、何かの時に力になってもらえるか、とも思った。でも実家は福岡です。 ・何かしら協力・共有の心を持つことが出来たら良いと思うから。	・会費が五千円に値上げする際出て、とても払えないので退会しました。 ・活動したくても（入会時）持ち出しの交通費、他で無収入の身には続けることができませんでした。 ・法務・家事・境内そうじ等忙しかつたので抜けました。 ・特に入会の必要性を感じないからです。 ・高僧の為後継を作りたい。 ・持たざる者の為、難しい。 ・なかなか女性教師のつながりがなく、孤独に活動していることが多い。 ・先方の方の業務や活動を知りたい、助言を求みたい。また、学びの機会も欲しい。 ・現在高僧の為。 ・参加できる方がいらしたから。 ・自坊法務多忙の為。 ・高僧の為。 ・女性のみで組織に入る意味がみえない。 ・特に必要性は今感じていないので。 ・男の別を今も男中心の社会になっていると思う。女性教師の存在、特に複雑な事情の方が多いや、組織となると、偏った美えの方がいたり、面倒な付き合いが多くなる。今ある教師の組織に女性教師が出席しやすいうことが多い。 ・僧侶としての修業の場を求めて、現実、今は不可能な状況にあります。東部の現状。 ・修行道場の一年に出来た会で、高僧は言っていました。それぞれ自分の仕事がいそがしくなり自坊消滅しました。 ・入会しても活動する時間がありません。 ・時間や体力の問題でそこまで広げられず。 ・全国女性教師の会設立から参加、新鮮な気持ちで志を共にする教師の方々と交流や活動に興味を持ったので。 ・組織に組み込まれるのは好きですが、自坊の仕事をして、自分なりに学習や修行を続けていきたい。組織には必ずバハラを要するのでは入らない。 ・会長からすすめられた。 ・衣坊所、日有会等、すでに複数の組織で活動している為。
--	---

三%) し、「ある」が減少(三六%↓二・五%) しているが、他の設問に比べ無回答がやや多くなっている。

その詳細は、自由記述欄(表③)に記述されているが、男性社会、男性中心、男性優位という文言が見え隠れしている。加えて、育児や、母親として教師と両立するのが大変など、様々な意見が述べられている。

他方で、「これから活動してみたいこと」という設問において、

- ・ 教師と寺庭婦人が仲良く協力できるような一助になりたい。
- ・ 女性ならではの、子育てや子供に関する活動があればできたらと思っています。
- ・ 女性教師がもっと交流が有り、情報の交換を出来たら良いと思うので、一年に一度でも交流の場がほしい
- ・ お給仕をさせて頂ける、お寺(小さくても何でも、どんな所でもと思います)が、何故私には与えて頂けないのだろうと思います。

・ まだお徳が積めていないのだろうと自問自答しながら諦めています。

・ お経のあがらないお寺はいっぱい有るのになとも思います。お経が読みたい!

・ 人々により添って、生きて行きたい。

などの想いも寄せられている。

四、アンケート調査のまとめ

ここでは、令和三年度アンケート調査の集計結果(抜粋)を概観した。これらの集計・分析により、現在の女性教師は、主として、

- ① 寺の娘が後継として教師になり、寺院から収入を得ているが、人数が少ない主に三十代を中心とした若手層。
- ② 約二十〜三十年前に教師となり、人数も多く主立ったコミュニティを形成し、主力となっている、主に六十代

を中心とした中堅・ベテラン層。

- ③ 年齢・体調等の状況により布教活動が行えていない（またはその意思がない）、主に八十代以上を中心としたリタイア・セミリタイア層。

といった層に大別することができる。

そして、アンケートの集計により、女性教師を取り巻く課題として、

- ① 年齢や体調の理由により活動ができない、する意思がない教師の存在。一方で、活動をしたくても男性社会での理不尽や、環境等の弊害により法務に支障を来しているとの意見。
- ② 年齢や家庭環境や立地のような理由で研修会等への参加も難しく、女性教師の組織への所属状況も世代に偏りがあり、様々な世代への知識や経験が共有される機会が得られにくい。
- ③ 極端な少子高齢の状況で、近年の教師認証数が少ない状況も踏まえれば、およそ三十年ほどで女性教師数が半減するおそれもある。

などの課題・問題が存在することが読み取れる。

五、アンケート調査にて顕著となった課題

（一）男性教師・他宗派女性教師との比較の必要性

当調査では、女性教師の実情に迫るべく集計・分析を行ったが、当調査で見られる事象が、日蓮宗の女性教師のみに起きている特異な事象なのか、あるいは男性教師や他宗派等にも共通しているような事象であるのかは、当然比較データがないと分析が行えないものである。

あくまでこうした調査の発展可能性として、男性教師や他宗派においても同様の形式の調査がなされていくことが

望ましいのではないだろうか。

(二) 詳細な回答内容における個人特定のリスク

本アンケート調査は、無記名形式で、統計化されたデータとして処理することで、個人情報へ可能な限り配慮した内容ではあったが、設問として、都道府県があることで、個人を特定されるのではないかと不安の声が寄せられた。あくまで、統計的に処理すること、加えて無理に回答するものではないことは対象者にも提示したものであり、そもそも当該設問は、平成十四年の調査では市区町村までの回答欄があったものを、本調査では削除したものである。

しかし、そのような不安の声があったこと、加えて、実際に都道府県によっては非常に回答数が少ない都道府県もあり、本調査の報告においては、そうした、リスクを排除するため、教区単位の集計とした。

(三) 「女性教師」という名称（呼称）の問題

本アンケート調査は、平成十四年時の調査を踏襲して行ったため、連続性を保つ意味で「日蓮宗全女性教師アンケート」という当時の名称を流用した。

それについて、「女性教師という呼び方は好ましくない」「この呼び方自体が差別ではないか」という意見も回答において寄せられた。

「女性教師」という名称は、当然ながら日蓮宗宗制には規定されていない。

宗制上は、あくまで「教師」についての定めがあるのみで、それが女性であるか、男性であるかということで宗制上の差異はない。^{一四}

それを「女性教師」と、女性と冠することで、却って女性という枠の中に落とし込められる——そういったイメー

ジを抱かれることも想像に難くない。

他方で、女性教師という名称は、「良い意味で、男性教師とは異なった視点を持つ女性教師像を強調・後押ししたい」という意図で用いられ始めた、あるいは用いられている向きもあるのではないだろうか。

「女性教師」という呼称を、いわゆる現代的なジェンダー観にそぐわない呼称として受け止めるか、あるいは男性教師とは異なる強みを象徴するアイデンティティの一つと受け止めるか、今後の議論を待ちたい。

六、おわりに

以上のように、令和三年度に実施した女性教師を対象としたアンケート調査について概要を述べた。

本稿はあくまでアンケート調査の概要であり、触れていない集計及び分析等が多く残っている。

また、政策提言的な内容も控えているが、当調査にて見えた課題を解消することで、つまり宗門組織に女性教師も活躍しやすい土壌が整うことで、宗門教師（布教活動）の充実をはかる——布教教化の多様性を担保することは言うまでもない。

更に俯瞰してみれば、当調査は、単に日蓮宗女性教師の実情を追うのみではない。LGBTを含めたジェンダーの視点で、「教団が自らの中にかかえこんださまざまな権力の階層性や弱者に対する抑圧的で不均衡な構造に批判の目を向け、それらを変革する意思を明らかにできれば、現代日本の仏教にも新たな可能性がでてくる」といった見解（川橋二〇一二・一三二）が示唆するように、教団の新たな発展に寄与する可能性も秘めているのではないか。

いわば、このアンケート調査で浮かび上がる課題・問題は、まさに宗門の生存に関わる課題・問題として捉えることができる。

女性教師のみの問題としてではなく、宗門全体が当事者として、当アンケート調査の内容が周知されるよう、別途

刊行のアンケート報告書に詳細な報告を委ねたい。

【参考文献】

- 総務局総務部編『平成二四年度版 日蓮宗宗勢調査報告書』日蓮宗宗務院 二〇一三年
現代宗教研究所編『日蓮宗全女性教師アンケート報告書』日蓮宗宗務院 二〇〇四年
文化庁編『宗教年鑑（平成十四年版）令和四年版』文化庁
近代日蓮宗年表編集委員会 現代宗教研究所編『近代日蓮宗年表』日蓮宗宗務院 一九八一年
日蓮主義代理部『日蓮主義』第一三巻第一二号 日蓮宗宗務院 一九三九年
荒井美月「女性による寺院継承と僧侶養成課題…天台宗女性僧侶へのインタビュー調査から」『京都女子大学大学院現代社会研究科紀要 第十四号』京都女子大学 二〇二〇年
尾谷卓一・梶山寛潮編『日蓮宗尼僧法団四十年のあゆみ―梶山日深上人の法功』ニチレン出版、一九九四年
川橋範子『妻帯仏教の民族誌―ジェンダー宗教学からのアプローチ』人文書院、二〇一二年
那須英勝他『龍谷大学アジア仏教文化研究叢書八 現代日本の仏教と女性―文化の越境とジェンダー』法蔵館 二〇一九年
丹羽宣子『〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉の宗教社会学―日蓮宗女性僧侶の視点から』晃洋書房 二〇一九年
モニカ・シュリンプフ『尼僧の目から見た現代日本仏教』『立教大学ジェンダーフォーラム年報第十五号』立教大学 二〇一四年

【注釈】

- 一 政府による、男女共同参画社会基本法に基づく、男女共同参画に係る、法定計画の「男女共同参画基本計画」（平成十二年に第一次計画を決定）にて、示された数値目標。 http://www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/index.html

二 なお、当該調査などを端緒として全国日蓮宗女性教師の会が結成されている。

三 國學院大學 研究開発推進機構 日本文化研究所 PD研究員・一橋大学大学院特別研究員。専門社会調査士。

四 丹羽宣子『僧侶らしさ』と『女性らしさ』の宗教社会学―日蓮宗女性僧侶の視点から―』晃洋書房、二〇一九年。

五 立正大学仏教学部教授。

六 主に平成二十九年十月三十日に現宗研にて開催の女性教師アンケート準備会議にて述べられた。

七 この二十四名について、宗務院に登録されている住所などの情報が、実態に即していないことが示されている。

八 当該設問は都道府県単位の回答欄で設定したが、集計は教区単位で行った。詳細は後述。

九 「その他」は、中山妙宗の復帰に伴う教師編入等で道場に入場していない教師など。年表参照。

一〇 例えば、「現在の満年齢が二十～二十九歳」で、「道場入場時の年齢が二十～二十九歳」の教師の人数、といったような、複数の条件をかけ合わせて集計を行うこと。

一一 後継ぎではなくても、寺院に教師として関わる必要ができた場合。

一二 親族や関わりのある教師などから、勧められて教師になった場合。

一三 前回調査時の「女性教師の全国的な組織が結成されたら入会するか」という設問から修正した設問となる。理由としては、尼僧法団や、前回調査等を端緒として設立された女性教師等の組織会があるためである。「女性教師の組織」としていうように、特定の組織を指した設問ではない。

一四 信行道場や加行所における扱いの違いも、「宗制上」には規定されていない。あくまで内規等によるものとされる。

女性教師関連近現代年表

年月	内容	出典	備考
明治6（1873）年1月22日	太政官布告にて尼僧の蓄髪・肉食・婚姻・還俗の自由を達する		
大正8（1919）年4月	深見耀宏、京都松ヶ崎涌泉寺尼衆修道院を創設。	宗報 喜多村略伝	
昭和12（1937）年8月1日	信行道場が初めて開設される。	日蓮宗事典	
昭和14（1939）年11月中旬	信行道場の開設以来初めて、尼僧信行道場（道場生17名）が身延山にて開設される。	日蓮主義	
昭和17（1942）年1月	宗会にて祖山学院を身延山専門学校と改め、教師養成機関として日蓮宗立の池上宗学林・光山学院・尼衆学林を設立。	宗報	
昭和21（1946）年	第二次世界大戦終結。		
昭和22（1946）年9月19日	普通試験合格尼僧の第9期信行道場、身延山にて開場される（～23）。	宗報	
昭和25（1950）年	専族救済を目的とした補教制度が創設される。	宗務院資料	有髪の尼僧（寺庭婦人）を養成する補教講習
昭和26（1951）年5月27日	補教講習会、身延山にて開設される。	宗報	
昭和26（1951）年10月29日	全国より各宗の尼僧300名が宗旨宗派を越えて参加し、世界永世平和記念万国殉難精進追悼法要を日比谷公会堂で挙行。全日本仏教尼僧法団HP	全日本仏教尼僧法団HP	http://jiibo.jpn.org/index.html
昭和27（1952）年7月29日	日蓮宗尼僧法団の結成準備会を東京谷中瑞輪寺にて開く。	宗報	
昭和27（1952）年10月28日	梶山智孝師、谷川善妙師ら有志尼僧が中心となって日蓮宗尼僧法団の結成式を身延山久遠寺にてあげる。	みのぶ	
昭和30年	僧階上の「補教」の取扱いが廃止された（補教信行道場は継続）。	宗務院資料	
昭和37（1962）年3月7日	尼僧法団関東支部、日蓮宗尼衆学林復興鉢鉢を東京新宿駅にて行う。	日蓮宗新聞	
昭和44（1969）年12月7日	大内妙信師、女性としては初の宗会議員に選出される（以降二期継続～昭和52年12月6日）。	日蓮門下仏家人名辞典	
昭和47（1972）年6月18日	日蓮宗尼僧法団、尼衆寮を身延山丈六堂に完成し、落慶入仏式並びに日蓮宗尼僧法団創立満20周年祝賀会を開く。	日蓮宗新聞	
昭和49（1974）年3月5日	日蓮宗と中山妙宗の合同復帰にともなう350名の教師認証式が中山法華経寺にてあげられる。	日蓮宗新聞	
昭和50（1975）年5月28日	日蓮宗尼衆宗学林、京都市松ヶ崎涌泉寺に再興され、30年ぶりに開校式をあげる。	日蓮宗新聞	
昭和51（1976）年3月	第35宗会にて、特別信行道場入場費が修正可決される。これより、尼僧信行道場は特別信行道場と改称される。以降、補教信行道場と隔年開設となる。	宗報	
昭和53（1978）年5月27日	特別信行道場が開設される。	宗報	
平成11（1999）年6月23日	男女共同参画社会基本法が施行される。		
平成14（2002）年	補教信行道場が平成13年度開催を最後として廃止される。	宗報	
平成14（2002）年10月	現代宗教研究所にて女性教師アンケートが実施される。	アンケート報告書	
平成16（2004）年3月31日	日蓮宗全女性教師アンケート報告書（現代宗教研究所）が発行される。	アンケート報告書	
平成17（2005）年4月26日	全国日蓮宗女性教師の会、宗務院で代表者会議を開き、発足。	日蓮宗新聞	
平成21（2009）年7月24日	最上稻荷教が日蓮宗に復帰し、日蓮宗所属辞令交付式が宗務院で行われる。総本山妙教寺と7つの被包括法人及び58人の僧侶が日蓮宗の所属となる。	日蓮宗新聞	
平成23（2011）年	特別信行道場が第二期信行道場に改称される。	宗報	
平成25（2013）年12月7日	松野蓮香師が大内妙信師に続き44年ぶりに女性としては2人目の宗会議員に選出される（以降二期継続～令和3年12月6日）。	宗務院資料	
平成31（2019）年1月29日	田邊木蓮師が参与推薦（什師会）にて、女性として3人目の宗会議員に選出される（～現在（二期目）に至る）。	宗務院資料	
令和2（2020）年3月1日	身延山大学女子寮「なんてん寮」が創設される。	なんてん寮より	